

奨励金No.1518

メディアコミュニケーションのリデザイン ——〈身体性〉・〈言語〉・〈環境〉に着目した応用哲学的探究

呉羽 真

山口大学 講師

Redesigning mediated communication in terms of applied philosophy concerning embodiment, language, and environment

Makoto Kureha,

Yamaguchi University, Associate Professor



本研究は、応用哲学の観点に基づき、コミュニケーションメディアの利用法を巡る慣習を問い直すことで、メディアコミュニケーションをより多様なものへと「リデザイン（再設計）」することに取り組んだものである。このために身体活動と言語活動の両面からメディアコミュニケーションの再設計の方法を整備し、それをテレビ会議やメタバースに適用することを試みた。結果として、コロナ禍終息後もオンラインコミュニケーションを社会にうまく取り入れていく方策について見通しが得られた。

From the perspective of applied philosophy, this study aimed to 'redesign' mediated communication by questioning conventional practices related to communication media, in order to make it more diverse. To achieve this goal, we developed methods to redesign both verbal and bodily aspects of communication and applied them to videoconferencing and the Metaverse. As a result, we gained insight on how to integrate online communication into society after the COVID-19 pandemic.

1. 研究内容

1.1 研究の背景と目的

新しいコミュニケーションメディアの登場とコロナ禍の影響によって、メディアコミュニケーションを巡る様々な社会的問題（デジタルディバイド、対面コミュニケーションの減少がもたらす影響への懸念、など）が生まれている。これらの諸問題の一因は、ある種のコミュニケーションのあり方を特権化する従来の偏狭なコミュニケーション観にあると考えられる。本研究では、こうした状況を踏まえて、応用哲学の観点に基づき、メディアコミュニケーションの「リデザイン（再設計）」に取り組んできた。コミュニケーションとは、様々なメディアやその利用に関する慣習に

よって形作られた、設計／再設計可能なアーティファクトである。従って、メディアコミュニケーションにおいて行われる言語的・身体的活動を暗黙裡に形作っている慣習や規範を問い直すことで、これまで見過ごされてきた身体性や言語を活かした、より多様なコミュニケーションの可能性が開かれると考えられる。以上の見通しの下、本研究では、身体活動と言語活動の両面からメディアコミュニケーションの再設計の方法を整備し、またそれをテレビ会議やメタバースに適用することを試みた。

1.2 実施内容

(1) コミュニケーションの身体的側面に関する研究

オンラインコミュニケーションは身体性に欠けるがゆえに対面コミュニケーションに劣る、という言説（「対面神話」）の批判的検討を中心に、身体活動に関する慣習を問い直し、コミュニケーションを再設計する方法を考案した。

その成果として、『認知科学』誌に論文「オンラインの身体性」を発表した。同論文では、コロナ禍に伴う対面コミュニケーションからオンラインコミュニケーションへの移行の中で、人々が不便を感じつつも適応している、という事実に着目し、コミュニケーションにおける「身体性」の再考を行った。この過程で、「身体性は、(1) 融通が利く (negotiable)、(2) 汎通的 (pervasive) である、(3) 多様 (diverse) である」という「身体性の3テーゼ」を提唱し、オンライン活動でも身体が重要な役割を演じていることを示した。

もう一つの成果として、2022年に開催された日本科学哲学学会第55回大会にて、大会シンポジウム「コミュニケーションメディアの哲学」(2022/12/3、名古屋大学、http://pssj.info/program_ver1/program_data_ver1/55/symposium/index.html)を企画・運営するとともに、代表研究者の呉羽自身も「対面神話を乗り越える——コミュニケーションの再設計に向けて」と題した提題を行った。同提題では、対面神話を、技術が社会のあり方を決定するという誤った技術哲学（「技術決定論」）に基づくものとして批判するとともに、この言説がある種の認知バイアス（メディアを用いたコミュニケーションがうまくいかない場合、ユーザー側の要因を無視し、問題はメディアそれ自体にあると見なす）の産物であることを示唆した。なお、同論文の内容は、日本科学哲学学会の機関誌『科学哲学』56巻2号に招待論文として掲載予定である。

(2) コミュニケーションの言語的側面に関する研究

言語（話し言葉や書き言葉等）もまた一種のメディアであるという理解の下、「ゆるスポーツ」（澤田智洋『ガチガチの世界をゆるめる』百万年書房、2020）のアイデアを参考に、言語活動に関する慣習を問い直し、コミュニケーションを再設計する方法を考案した。この目的のために、ワークショップ「コミュニケーションをゆるめる」（2022/12/17、京都出町柳 GACCOH、<https://gaccoh.com/event/221217>）を開催し、共同研究者の藤川がナビゲーターを務め、代表研究者の呉羽、共同研究者の久木田も参加した。同企画では、参加者が、コミュニケーションがうまくいかなかった経験をもとに、コミュニケーションゲームを作って遊ぶことで、「普通」のコミュニケーションをゆるめ、多様なコミュニケーションのあり方を見いだすことを試みた。その結果、上記のコミュニケーションの再設計の方法の有効性を確認するとともに、それがオンラインコミュニケーションにも適用可能であるという見通しが得られた。

(3) メタバースに関する研究

本研究の実施期間中に、「メタバース」という言葉が注目を集めた。ビジネス界でやや誇大宣伝されたそのインパクトを冷静に見極め、またそこで生じている問題について検討するため、専門家を招いて2回にわたる「ReMediCom（メディアコミュニケーションのリデザイン）講演会」を開催した。第1回は、メタバース文化エバンジェリスト・Vチューバーのバーチャル美少女ねむ氏を招聘し、「メタバース進化論～仮想世界で広がる新たなコミュニケーション～」と題して、メタバースにおけるコミュニケーションについて講演いただいた。(2020/10/30、オンライン、https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/102352/411f9945f150d050ae7c63c495d4a159)。また第2回は、VR研究者の鳴海拓志氏（東京大学）を招聘

し、「アバタによる身体性と社会性のリデザイン」と題して、VRアバタを用いたコミュニケーションについて講演いただくとともに、VRアバタの社会的課題について議論を交わした（2023/1/14、オンライン、https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/102352/e25eb22319bd0a1965d6dd7f9a6ec5e1）。講演会は2回とも公開にて実施し、多数（30～50名）の参加者を集めた。これらの講演を通して、メタバースの可能性と課題について、知見が得られた。それを基に、メタバースに関する論文を執筆中である。

1.3 今後の展望

本研究では、多様なコミュニケーションの実現のために、メディアの利用法を巡る慣習を問い直すというアプローチを採用し、一定の成果を得た。今後は、ロボティクスの研究者などと連携し、メディアそのもののデザインに批判的視点を埋め込むアプローチの確立を目指す。

2. 発表（研究成果の発表）

論文

- 呉羽真 2022. 「オンラインの身体性」、『認知科学』29(2): 158～162.

学会発表・講演

- 呉羽真、「対面神話を乗り越える——コミュニケーションの再設計に向けて」、日本科学哲学会第55回（2022年度）大会シンポジウム「コミュニケーションメディアの哲学」、名古屋大学、2022年12月3日。（口頭発表およびシンポジウムのオーガナイゼーション）
- 呉羽真、「ロボットと社会」、第162回関西公共政策研究会、オンライン、2022年11月5日。（口頭発表）
- Minao Kukita, “Fake or a new reality?” IEEE RO-MAN 2022, Workshop “Symbiotic Society with Avatars: Social Acceptance, Ethics, and

Technologies,” Sept. 2nd, 2022, Naples.（口頭発表）

- 呉羽真、「コロナの時代の愛その他の人間関係について——コミュニケーションメディアの技術哲学」、アバター共生社会の倫理ワークショップ、オンライン、2022年6月12日。（口頭発表）